

みどりの文

平成最後の受賞者表彰

県造園建協 13回目、888通応募



県造園建設協会の「諸井道雄会長」は31日、福島のエルティで今年度

の一語一絵「みどりの文」の表彰式を行い、出席した入選者に賞状と記念品を贈った。
4月28日の「庭の日」をPRする一環で、福島最優秀賞を受賞した(左から)手紙・エッセー部門の萩原純子さん、絵手紙部門の石井朝子さん、フォト部門の大島市郎さん

幅広く、庭や緑への思いは世代を超えて共有できるテーマであり、人生にかけがえない存在であると改めて感じた」と述べた上で、「私たちは伝統と熟練の技を磨き、皆さんと心が通い合った庭づくり、環境づくりに努力

したい」と決意を示した。諸井会長と花見政行福島民報社常務取締役が、各部門の最優秀者など入賞者一人ひとりに賞状等を手渡した。
※受賞者は9月28日付既報

上位に残る句は「何らかの困難を抱えた子供が多い」とし、「吐き出したい」と思っている小さなつぶやきと季語が、俳句という文学作品にしてくれる。それらはオリジナルティとリアリティのあるつぶやき」と評価した。



夏井さん 百年後へ種まき

夏井さんは全国の小・中学校で俳句の授業「句会ライブ」を開いている。当初は俳句甲子園の底辺拡大策として始めたものの、ある小学校で上位入選した子供の素行がよい方向に変わったとの事例を聞いた。改めて「言葉の力はすごいと思った」とし、句会ライブを俳句甲子園のためではなく、言葉について語り合う場へと変化させた。

最後に「教育と文化は百年先を考えて種をまくことが大切との思いを強くしている。仲間たちと百年俳句計画という志を掲げているが、私が今やるべきことは種をまくこと。芽を出し、少しずつ育ち、木になり、豊かな森を作っていくように種をまいておかないと、言葉や心の豊かさはないと締めくくった。
当初定員300人で募集したものの、希望者が殺到したため、定員840人に変更して開いた。

福島建設工業新聞社 遠藤